

講演Ⅱ 「ゆたかな感性を培うには、体験！」 —自尊感情・自己肯定感をはぐくむ—

汐見稔幸



みなさん、こんにちは。

ただいま、超多忙な生活をしておりまして、十分な準備ができず、申し訳なく思っております。皆様のお役に立てるお話ができるかどうか不安です。動物も、イヌを飼っていたくらいで、現在ではもう何も飼っておりません。今、動物を飼育している教室や、幼稚園・保育園の現場に十分関わっているわけではございませんので、お話しするようなことがあるかどうか不安でしたが、中川さんの熱心な活動に絆されたところがございまして、何かお手伝いができればと思い、講師を引き受けさせていただきました。

今日は、「豊かな感性を培うには」ということで、お話をさせていただきますが、これには3つのキーワードがあります。一つは、「感性を培うという」というときの「感性」です。そのためには体験が大事であるといわれていますが、二つめはその「体験」です。それから三つ目は、「自尊感情・肯定感をはぐくむ」というときの「自尊感情」です。この三つのキーワードを繋げなさいということが、私の今日のテーマであると思っております。私の専門は、どちらかというと人間学や哲学などに近いものですから、少し、理屈っぽい話になることをご容赦ください。

1 体で覚える知・感性

最初に、感性とはいったい何なんだということをお話ししたいと思います。感性という言葉は良く日常で使われます。人によってその意味合いは必ずしも同じではな

く、非常に広い意味合いで使われています。哲学的には、「理性」という語と対になっている語です。「感性的認識から理性的認識へ」などということを良く言います。ヘーゲルなどでは、その間に母性的な認識などということもあり、「感性・理性・母性」などという言い方も良くします。理性で物事を判断するということが、人間が人間たる所以で、感性というのは、その出発点であるというふうに考えられていて、理性よりも下位として、思われていることが多いわけです。本当に、感性というのは、理性よりも下位で、認識の出発点に過ぎないのかどうか、ということを、少し考えてみたいと思います。そのために、少し視点を広げてしまいますが、近代的な知のありかたや枠組みについて考えてみたいと思います。

私たちは学校でいろいろなことを勉強します。その時に、動物の体はこうなっているとか、この動物はどのような分類に属するのかとか、ということについて、自ら解剖したり分類したりして身につけるものではありません。学校というところは、大部分のところで体験とは切り離して、教科書や教材を手がかりに、先生が知識を上手に伝えていくというやり方で、知識を身につけさせます。このような形での知識の身につけ方は、人類の歴史からすれば、ごく最近に始まったことに過ぎないわけです。知識というものは、元々、体とは不可分のものだったわけです。それが、近代になってから、体で体験することとは切り離して、知識だけで伝達されるようになってきたということが最大の特徴です。先日テレビでやっていたのですが、70歳くらいの町工場の職人さんが、なめらかな面をつくるという作業をしていました。その方は、削った面をちょっとさわっただけで「だめだ」と判断し、また削り始めるわけです。それを計測したら、たった0.01mmくらいの凹凸差でしかないわけです。それをさわっただけで判断できてしまう。そして、どこを削ればよいのかということも勘みたいなものでわかつてしまう。このようなことがどうしてできるのかと聞かれたら、たぶんその方

は言葉では説明できないでしょう。そのような知のあり方。たとえば、昔の農民にとっては、人工肥料などないわけですから、土を見極めることが、きわめて重要な仕事であったわけです。計測器も何もない中で、どのようにして土を見極めるのか。それはまさしく、さわってみる。目で見る。臭いをかぐ。それでわからなければ口に入れて食べてみる。そのようにしながら、土を診断するわけです。そのような判断に伴う知識については、なかなか言葉で伝えることは難しいと思われます。つまり、これまで多くの人たちが所有していた知識というものは、その人の行動から切り離されてあるのではなくて、その活動の中に含まれている知であったわけです。ですから、その知識を手に入れたければ、その人と同じことを一から始めなければならないのです。そして、体で覚えていくことが、知識を繋げていく基本だったわけです。したがって、これまでの知識は人間の業の中にあったと考えて良いと思います。技というのは、科学化された技術ではなく、体の中に記憶されたような技術のことです。そして、知識は、技を發揮すべく体が動こうとするときに、体を制御するために用いられるものだったわけです。わかりやすく言えば、われわれが自転車に乗るときに、どのように乗れば倒れないのかと口で説明しろと言われてもできません。ある哲学者が言っていたことですが、知識の中には2種類あって、「Nowing How」ということと、「Nowing That」がある。われわれは、「Nowing How」をたくさん知っていたとしてもそれを口に出して説明することはできないということです。このような分類のしかたもできますが、体で覚えた知識、すなわち技は、体とは切り離して考えることはできないということを、お話ししたかったのです。

これを脳の活動として見ますと、大脳新皮質で行われている活動よりも少し中方、すなわち古皮質や小脳等で判断しているものです。たとえばピアニストはピアノを弾いているときには、大脳新皮質はほとんど活動していないということがわかっています。このように新皮質以外のところで判断している知であると思われます。このように近代以前までは、知るということは、実践と深く関わっていました。ご存じのとおりアリストテレスという哲学者は、どのような知識のほかに「テオリア」という知識を強調しました。「テオリア」という語

は、現在のセオリーという語の語源です。それは、職人たちの知と違って、頭の中で反芻して手に入れるという、いわば哲学知です。アリストテレスは、そういう知の大しさを強調したわけです。ヨーロッパの伝統として、知識にはこの2種類があるということになっています。テオリアの知と言っても、たとえば夜星を見てそこから星座を見つけ出すとか、雲を見て天候を予想するとか、実践と関連づけてテオリアを展開するということが大部分です。このように、近代以前の知というものは、実践と密接に結びついたものであると言えると、私は思います。

2 知の部分だけの近代の知

ところが、近代社会になってからの知というものは、体で覚えた技から、知の部分だけを取り出したものになってきました。すなわち、技の部分から知の部分だけをそぎ落としてきたということです。そぎ落とした中で、記述できる部分を記述するという作業をするわけです。それをするために使われたものが、数学と論理学だと言われています。たとえば、コペルニクスやガリレオという学者がいますが、ガリレオは深く神を信じた人間で、神がつくった世界が、こんなに複雑な様相をしているはずがなく、非常に簡単な数学でその構成が表されるはずだと考え、社会の構造を数学で表すというチャレンジをしました。このように数学が発達した地域で、体から独立した知を確立していました。近代の知というものは、実践の中に含まれているものではなくて、実践を伴わない知を身につけていくことが、近代の学校ではできるようになってきました。その後もこの傾向はどんどん強くなっていきました。そして、知識をどんどん詰め込むことが可能となり、そこに限界を感じるようになってきたということも言えるわけです。近代の知を改めて整理しますと、知ることとできることが切り離されて、異なる次元のものとなりました。それまでは、できることとその中に含まれている知は切り離せなかったですから、知ることとできることは常に同じであったわけです。このことは、別の言い方をすると、対象に体ぐるみでのめり込むと言ったような知り方がだんだんできなくなつて、対象そのものの名称をたくさん覚えているだけなので、物事そのものを知るということが難しくなってきたと表現しても良いと思います。近代の知は、物事の名前に

ついての知識はもっているが、その物事を本当にわかっているわけではないということになります。対象物に対して、想像的なことがだんだん働くくなるような知識になってきたとも言えるわけです。このことは、近代の知の弱点でもあるわけです。

3 感性・感受能力「わかる」ということ
そこで改めて登場する言葉が「感性」ということになります。こういう文脈で考えてみると、職人や農民・漁民が何かを知るというときに、自らの持っている技とは切り離せなかつたわけです。自分の体の様々な感覚器官を総動員して、対象を知るあるいは感じるといかなればなりません。それは、その時に対象から来る情報をどれだけ細かく感じ分けることができるかという「感受能力」と定義して良いのではないかと思います。われわれが体で感じるときの感受能力や細やかさを、われわれは感性と呼んできたのではないかと思います。そういう意味で感性ということは、体の諸感覚を使って、直感的な価値判断をいつも伴います。そういう意味では、理性の知よりも直感的な価値判断に作用すると考えて良いと思います。価値判断は、直感的に判断している場合が多く、価値判断に対する説明は、直感的な判断を説明しているに過ぎないことが言えると思います。直観的な判断が、人間の中で相当大きな地位を占めていると思います。

そういう意味で、感性と現代の教育がここで繋がってくるわけです。近代の知は、技から、感性から切り離された知ということが言えます。このように脱身体化した知のおかげで、近代ではたくさんの知識が生まれました。身体化した知識は常に身体の能力の限界の中にあるわけですから、そんなに膨大に増えることはありません。しかし、そこから切り離せば、知識と知識を繋げてどんどん膨大化することができますから、莫大に知識が増えていったわけです。このように増えた知識を今度は技術に応用していくということができるようになりました。これが、近代の科学技術革命の本質で、これによって、現代社会が作り上げられてきました。しかし、人間の認識という面から申し上げますと、われわれの身の回りにある対象に身を投じ、対象を生き生きと感じ取って、そしてその対象を変えたり、対象に新しいものを加えたりするということは、どんどん後退して行かざるを得なくなってしまいました。「わかる」というこ

とが、対象がもっている意味が感じ取れるということとしたら、対象を生き生きと感じ取るということができなくなるほど、「わかる」ということも後退して行ってしまうという可能性をもっているのです。したがって、脱身体化した現代の知というものは、何かがわかるという条件に欠けている可能性が非常に高くなっているということです。人間が深く物事をわかるということが、だんだん難しくなってくるということが、ここから読み取れるわけです。知るということが、本当に物事がわかっているとかわかっていないとかという、ある深さの感覚を伴うことがあると思いますが、それを私は知のリアリティと言っています。その知のリアリティーが弱くなつて行くということが、現代の知のあり方です。それをどう克服するかということが、教育の課題となつていくのです。脱身体化した知が膨大に増えていくことは避けられません。しかし、それだけではなくて、今度は脱身体化した知をもう一度身体化するということが課題になつていくわけです。そのための様々な知を工夫していく必要があります。昔のように技と一体化した、身体化した知を復活させることはできません。皆が職人的な世界に戻ることができればそれは可能かもしれません、それはたぶんできないことだろうと思います。それは、昔のように子どもたちの周りに豊かな原っぱや河原を再現すれば良いということが理屈では可能であつても実際には不可能なことと似ています。そこで、知るということのリアリティーをもう一度呼び戻すために、再身体化した知をどのように身につけるかという工夫が必要になってきます。これが現代の大きな教育の課題だと思います。私は、動物の飼育とはいつたま何なんだろうと考えていました。動物を飼うということは、一つの生命を預かっているということですから、失敗は許されないことになります。間違つてしまつたら殺してしまうことになるわけですから。そういう意味では、対象に触れるとか世話をするとかということをやらないと飼育というものは成り立たないわけですから、必然的に身体化せざるを得なくなるということです。このように、世話をしないと死という悲しい局面が待つているわけですから、必然的に子どもたちは世話をせざるを得ない状況に置かれていくわけです。動物を飼育するという技は、抱いたり、洗ったり、餌をやったりといふ

ことですから、必然的に感性を鍛える訓練になっていきます。

そこで、感性ということを考えるためにちょっと脱線いたしますが、言葉の感性ということを考えるときにこういうことも必要であるということを申し上げます。これは、私の知人の保育所(学童保育)における実践です。学童保育の皆で、春のある日に散歩に出ました。あるところにヨモギがいっぱい生えていました。それを見た保育者は、「みんな見て。これがヨモギよ。」と言ってヨモギを見せたわけです。「これを採って持って帰ってヨモギ団子を作ろよ。みんなヨモギの葉っぱ摘んできて。」と呼びかけました。子どもたちは、たくさんの草花がある中で、ヨモギを探して摘んで、先生のところに持ってきてました。それを見た先生は、「これはだめ。これは摘むっていうのではないのよ。これはむしるというの。摘むというのは、こういうことなのよ。」と、子どもたちに摘むということとむしるということの違いを教えました。実際に「摘む」という日本語に込められた意味は、非常に細やかな愛情を込めた行為です。私はこの実践を聞いて、言葉の教育とはこういうものだと、初めて認識した記憶があります。言葉は、豊かな感性ときめ細やかな声がセットの中で生まれてきたものです。摘むとかちぎるとかいう行為を区別するために言葉が生まれてきました。ところが、知と体が切り離されるようになつてくると、言葉は言葉だけでは覚えられなくなつてきます。さきほどのように、摘むということとちぎる、引っこ抜くということの違いを体で覚えるという時代ではなくなつています。言葉は、このような行為と一緒に覚えていかなければ、その言葉の裏に隠された、人間がその言葉に託したある種の感性が、子どもたちに伝わらないのです。私の知り合いの福島県の国語の教師たちは、作文を書いても、言葉を感性として感じることができなくなつてきているために、たとえば縄文時代の読み物を読むときには、まずその時代の体験をするという意味で、火をおこすとか、食べ物を自分たちで採つてくるとか、どのような体験をさせています。そういうことをさせないと、文章を読んでも意味がつかめないということで、どのような実践を今やっています。すべて基本的には同じことだと思いますが、体を使って体験しながら、そこで、生まれたときの言葉の意味を自ら再体験して

いくのだと思います。

動物の世話と感性というものは、実は同じことなんだと思います。体ぐるみで世話を体験する、つまり、抱いたり餌をあげたりすることによって、その体験の中に含まれている知や価値観というものを少しずつ理解していく。それが、その子の感性のベースになっていくのだと思います。それは、動物の命を感じる感性だと、動物と共生することを嬉しいと感じる感性だと、動物の世話をすることで、動物の役に立っているということを喜ぶ感性。このような価値観を伴った方が、子どもたちの感性になっていくのだと思います。

4 日本の子の自尊感情の低さ

さて、もう一つのキーワードとしての自尊感情についてお話ししてみようと思います。必ずしも自尊感情ということについて、みなさんが共有されているわけではないのですが、最近はこの言葉がよく使われます。これが問題としてあげられたのは、最近の子どもの自尊感情が低いということが言われてきているからです。たとえば、今の日本では、学校に行きたくとも行けない、いわゆる不登校の子どもが十何万人もいるということで、これは先進国の中ではずば抜けて多い値です。そして、最近では、せっかく学校を出たにもかかわらず、社会に出てつまづいて、家から出られなくなつてしまつたという若者が増えています。このことについての新しい名詞ができまして、「引きこもり」と言われるようになりました。そのような若者は、今の日本では百万人は下らないだろうと言われています。アメリカの特派員が日本に来て10年くらい経つそうですが、日本がどんどん変わつていて、そこにショックを受けているということで、「Japan as No. 1」と言われていた日本はどうしたのか?日本は世界からこう見られているのだということを知ってほしいということで、ある本を書きました。そのタイトルは、「引きこもりの国」と言います。その本の中に、引きこもりが百万人以上いることを、日本人は知っているのかということが書かれています。また、そういう国は世界では日本しかないんだということを日本人は知っているのかということが書かれています。そして、こんなにたくさんの引きこもりをつくつて日本システムが、現在の社会に合わなくなつてきていることを、日本人はまだ気づいていないと警告しています。国際学会に行きますと、引

きこもりの人間が百万単位でいると報告すると、参加者は皆びっくりします。そして、それはどういう人間なのか、誰が食べさせているのか、親が食べさせているのか、どうして働くかせないので、等、矢継ぎ早に質問が来て、ほとんど理解できないというような反応があります。そのような背景に一体何があるのかということですが、やはり、育て方そのものに何か問題があるとしか考えられません。このようなことと、自尊感情が低いということと、かなり繋がりがあるのではないかと思います。ちょっとデータを見てまいります。これはもう10年くらい前になりますので、ご容赦ください。これは、小学校5年生で自己評価を比較したもので、ベネッセが行った調査です。「あなたは勉強ができる子ですか?」「あなたは友達から人気がありますか?」「あなたは正直な子ですか?」「あなたは親切な子ですか?」「あなたはよく働く子ですか?」「あなたは勇気ある子ですか?」というような質問項目があります。これを4件法で答えさせたものです。東京の場合、「勉強ができる子ですか?」について、「良く当てはまる」と答えた割合が、8.4%，ソウルも8.6%で非常に低い割合です。北京はちょっと上ですが、ミルウォーキー43%，オーバーランド27%，サンパウロ37%ということで、ちょっと桁が違います。「あなたは友達から人気のある子ですか?」について、東京は9.8%，ソウルは11.2と低いですが、北京は31.6%，ミルウォーキー35%ということで、東京は低い値になっています。「あなたは正直な子ですか?」について、東京は12%，ソウルは27%と離れていきます。北京は39%，ミルウォーキー49%となっています。「あなたは親切な子ですか?」について、東京は12.3%，ソウルは26.4%，北京は41%，ミルウォーキーは59%。「よく働く子ですか?」について、東京は14.3%，ソウルは31.7%，北京は39%，ミルウォーキーは67%。平均で東京は12.6%になりますが、他の国と比べると1/3~1/4となっています。どれかの項目が低いといふのなら議論の余地があるのですが、すべての項目で極端に低いということですので、どうも日本の子どもは心の持ちようについて、自分に対して肯定する基準が高いのか、自分を肯定する感情がうまく育まれていないのか、いずれにしても非常に低い値です。ソウルの子どもも値が低いということで問題になったのですが、それでも日本の2倍

はあります。また、将来の希望についての調査も、日本はすべて最下位でした。また、同じような調査を他の都市でもやっていますが、日本の値はどこでもすべて最下位です。この結果は一体何を表しているのかということと、日本の子どもは、自分に対する感情が非常に低いということです。また、自分の子どもの育ちに満足している親が、世界の中では抜けて低いという結果もあります。親が自分の子どもの育ちに満足していないことと、子どもは自分に自信がないということが、どうも繋がっているような気がします。自分に自信がないので、他人の目が気になる。だから他者に自分をさらけ出すことができない。対人関係に気遣いが多くなる、などということは、ここから出てきていることではないかと思います。今、若いお母さん方の間で、友達作りが苦手だという人が増えてきていて、孤立感を感じている人が多くいます。自分のありのままをさらけ出すと、何を言われるのか不安で仕方ない。こういうことも、すべてここから出発しているのではないかと言われています。自尊感情をどう高めていくのかということが課題になっていますが、このことと、引きこもりが百万人以上いること、不登校が多いということ、母親が自分の子の育ちに満足感がないこと、子どもが自分に自信がないこと、これらがすべて繋がっているような気がします。これらの原因ということについてですが、ここで3つくらいのことを言っておきます。

5 自尊感情が低いことの原因?

一つには、幼い頃から自分で選択することがすごく少ないとということです。ある幼稚園や保育園などでは、自分たちが選んで遊ぶことを重視します。そうではない幼稚園などでは、ほかの子に合わせさせるような保育をしています。そうすると、子どもは、良い評価をもらうために行動するようになります。昔と違って、今では、幼稚園や保育園で、地域社会の中に入つて群れて遊ぶということがほとんどありません。群れて遊ぶということが、子どもたちにとって自己選択の場だったわけです。家の中では、自己選択の場がとても少なくなります。他人の指示で動いているときは、差し手は他人で、自分は駒になっているだけのことです。このような場合の自我の育ち方が心配だということを、昔ある心理学者が理論化しました。このような場合、私の主人公は私であるという感覚がうまく育まれない

わけです。二つめには、自尊感情のベースは、私の主人公は私であるということです。日本の母親が発する言葉でいちばん多いのが「早くしなさい」という言葉だそうです。「頑張れ」という言葉も、「あなたはまだ頑張りきれていない」という否定的な意味が言葉の裏にあります。三つ目には、自分がここにいることは意味があると感じることが少ないのでないかということです。昔は家の手伝いをさせられたので、役役に立っているという感覚を持ちやすかったのではないかと思います。人間は他者の役に立てることがいちばん嬉しいわけです。他者は競争相手になり、役に立つことを感じる対象ではなくなっています。勝っても本当は嬉しいわけではないのですが、勝ったら嬉しいという価値観を植え付けられてしまっているのです。ですから、自分が他者の役に立っているという感覚が、だんだんなくなっています。私は、自尊感情というのは、意味のあることだと感じていることだと思います。動物の世話をすると、動物の役に立つ存在である、ということを感じ取らせる、非常に大きなきっかけとなっています。これを私は「役立ち感」というふうに言っています。役立ち感が自尊感情を高めるということについて、次のような事例があります。鳥取大学医学部教授の高塚均さんという先生がいらっしゃいますが、数年前まで県立赤崎高校の先生でした。担当はレクレーション、コミュニケーション能力を育てるという担当です。赤崎高校はもう廃校になってしまい、ここはいろいろ問題の多い学校でした。高塚先生の奥様は保育園の看護師をされていて、時々中学生や高校生がボランティアで訪れたとき、意外とつっぱっている生徒が人気があることに気づきました。その話を高塚先生が聞いて、これはヒントになると思ったわけです。結論的に申しますと、高校3年生の半年間は保育園に連れて行って子どもたちの世話をさせる。残りの半年間は、老人施設に連れて行って、お年寄りの世話をさせるということを授業に組んだのです。高校1年生と2年生は、そのための訓練機関で、体育館で鬼ごっこのようなことをさせ、人の体に触れさせることを行います。人の体に触ることはとても抵抗感がありますから、抵抗感を持たないようにするとか、二人で向き合って自己紹介をさせたとき、聞く方は無視して

聞け、というような訓練も行い、それがどんな気持ちだったかを話し合わせるとか。このような訓練を行って、3年生で実践を行うわけです。しかし、老人施設などの実習では、結局コミュニケーションがとれなくて帰ってきてしまうという生徒もいます。しかし、何回か訪問するうちに、帰り際、手を合わせられたりして、自分が役に立っているという感覚を持つようになります。このようなことがきっかけとなって、どんどん子どもたちが変わっていきます。その子どもたちに会って話を聞きましたが、今の若者にしては堂々としていて、自分が役に立てるということが本当に嬉しいと話していました。人間は、人の役に立てるんだと気づいたときにいい加減になれなくなります。そして、自分が嬉しくなります。これが自尊感情だと思うのですが、それが、生命のあるものと関わっていくという意味で、動物飼育は格好のものだと思います。

6 知の身体化と自尊感情と動物飼育

動物が生きているということを喜ぶ体験を通じて、自分も同じ生命があるということに気づきます。これも方私は自尊感情であると思います。自尊感情は多様な機会に身に付けていくのですが、動物飼育は、自分の命を感じていく体験なんだと思います。子どもたちの自尊感情が動物を飼育することでどのように変わっていくのかということも、是非調査し、その結果を伝えていっていただきたいと思います。

最後に、私が申し上げたかったことは、現在の知識は、あることを犠牲にして成り立った知識であるということです。その意味では、身体の中に人間が元々持っている知というものが、リアリティの源泉だと思います。それが弱まっていくことによって、近代の知の歪みができてしまつたわけです。私たちの知をもう一度身体化していくときに、きっかけになるのが、一つには飼育活動であるということです。それが実は、自尊感情の芽生えに繋がっていくものであるということです。そのような視点で今日はお話をさせていただきました。

感性・体験・自尊感、この三つが繋がって理解いただけたでしょうか。どうも失礼いたしました。

(白梅学園大学学長)